

今号は始めに1994/1995MarsNote(12)「1995年四月のハッブル望遠鏡による北極冠(082°Ls)」"On the North Polar Cap by the HST on 8 Apr 1995 at 082°Ls"が採り上げられている。画像送受信テストの後に Jim BELL氏から送られてきた1995年の北極冠の画像(表紙↓に掲載、 $\omega=282^\circ W$ の方向から撮られている)と1970年代にマリナー9号とパイキングが捉えた同じ様な季節の北極冠の画像を比較している。HSTの画像に合わせたグリッド図に1970年代の画像をマッピングして、HSTの画像と比較する試みである。火星の此の画像の季節は北半球の夏至前で、北極冠は融解が進み、リマ・ボレアリスやカスマ・ボレアレなどの亀裂が入っている。作図して比較した結果はHSTの画像の解像度は悪いもののほぼ同様で、廿年前と変わっていないとしている。なお、1980年代にアメリカで喧伝された北極冠の亀裂リマ・テニウスの事にも触れて、此の画像を見ても、どこにも見あたらないではないかという結論である。(Cover→ HST image at 082°Ls in 1995.)

OAA Mars Section は1994/95接近の最終回となった。今期の報告の総括と国内外の報告数の多かった観測者がリストアップされている。

LtEは、比嘉保信氏、森田行雄氏、木村精二氏、岩崎徹氏よりのものが見られる。国外からはCarlos HERNANDEZ (USA)、Jim BELL(USA)、Daniel TROIANI(USA)、Paolo TANGA(Italy) Mike MATTEI(USA), Peter WLASUK (USA), Giovanni QUARRA SACCO(Italy)の各氏からの来信が紹介されている。メールアドレスの交換もあって電子メール時代の始まりであった。

Jim BELL氏からのメールにはHSTの1996-1997の火星撮影スケジュールがあり、この号で紹介されている。また、別ページに「藤沢便り」として村上からの通信がLtEと別にまとめられている。

筆者(Mk)による記事として、CMO-CLICKSが始まった。インターネット火星情報の紹介のページである。また、八月の天象とTen Years Ago (7)も掲載されている。

TYA(7)はCMO#012(10 July 1986), 廿年前のCMO#013(25 July 1986)の二号分の紹介である。この期間に1986年接近の最接近(16July)をおかえていた。季節は200°Lsほどで、南極冠の縮小の進み始める時期であった。日本では梅雨時、観測報告数は少なかったが、南氏は臺北に滞在中で観測に励まれていた。台風の影響があり欠測になった日もあったとのことである。

裏表紙の「シー・エム・オー・フクイ」には中島孝氏による厳しい会計現況の報告と、さらなるカンパのお願いが掲載された。他にはCMO#125(p1131)から#176(p1870)までの正誤表がある。 村上 昌己 (Mk)

